涙によってつながる　　マタイ 26:69-75

バプテスマのヨハネから洗礼を受け、四十日四十夜荒野で断食したあと、イエスはガリラヤに来て宣教を開始しました。そのときの第一声は「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」マタイ 4:17 でした。イエスはその後も、ことあるごとに悔い改めをさまざまな形で教え続けました。あるときには、小さなこどもを人々の真ん中に立たせ「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。」マタイ 18:3 と教えています。なぜイエスはくりかえし悔い改めを教えたのでしょうか。それは、イエスご自身が言っているように「悔い改めなければ、だれひとり天国に入れない」からです。自分は天国に入れるような者ではないということを知ってそのために真剣に自分の罪を悔い改める人こそ、天国に入ることができると教えました。

他の人は悔い改めなければならないが、自分には悔い改めなければならない罪などないと言うことができる人は誰もいません。聖い神に近づけば近づくほど自分の罪が分かるはずです。悔い改めのない生活は、ちょうど罪という石を心の中に溜め込んでいくようなものです。罪の石は取り出して捨てないかぎり、毎日どんどんたまっていき、ついには、身動きがとれなくなり、その重さで潰されてしまいます。

現代はものごとを前向きで積極的か消極的、否定的かに分けて考え、否定的と思えるものを嫌う風潮があります。そして「悔い改め」というと否定的なもの、暗く、後ろ向きなことと考えられていますが、決してそうではありません。むしろ悔い改めは前向きなものです。悔い改めは私たちの心の重荷をとりのぞき、心を明るくし、自由にします。それは心に喜びを与えるものです。イエスは、自分の罪を認めず悔い改めようとしない人々を嘆き、時には憤りを覚えられましたが、逆に悔い改めてイエスに従った人々を大いに喜ばれました。イエスはルカ 15 章で「あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」ルカ 15:10 と言って、悔い改めは神を喜ばせるものであり、私たちにも喜びをもたらすものだと教えています。

イエスばかりでなく、イエスの弟子たちも悔い改めを教えました。イエスに選ばれた十二弟子はイスラエルの各地に出て行って悔い改めを説きました。マルコ 6:12-13 に「こうして十二人が出て行き、悔い改めを説き広め、悪霊を多く追い出し、大ぜいの病人に油を塗っていやした。」とあるとおりです。ペテロは、ペンテコステの日にキリストの十字架と復活を力強く語りましたが、それを聞いて心刺されたひとびとは「兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか。」と救いを求めました。それに対する答えは「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。」使徒 2:38 というものでした。

ペテロはおもにユダヤ人に伝道しましたが、パウロはおもに異邦人に伝道しました。そのパウロは異邦人に対して「神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこででもすべての人に悔い改めを命じておられます。」使徒 17:30 と教えています。使徒たちは、ユダヤ人であれ、異邦人であれ、どこの誰に対しても悔い改めを説きました。「ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。」使徒 20:21 また「ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行ないをするようにと宣べ伝えて来たのです。」使徒 26:20 とパウロが言っているとおりです。使徒たちにとって伝道とはひとびとを悔い改めに導くことだったのです。

確かに時々、聖書や信仰に基づいた本がベストセラーになり、キリスト教がテレビドラマや映画になって多くの人が見ること。クリスチャンの芸術家、実業家、スポーツ選手が活躍すること。どれも素晴ら

しいことで、それによって人々はクリスチャンの信仰に、わずかなりとも触れることができます。「氷点」を書いた三浦綾子さん、詩画を書きつづけている星野冨弘さん、聖ルカ病院の日野原重明先生、NHK英語会話の講師だった東後勝明教授、NHKの歌のおねえさんだった森祐里さんなど、多くの人がキリスト教や聖書を広めるすばらしい働きをされました。こうした人がこれからも多く出ることを願います。しかし伝道が進むというのは、たんにキリスト教がよく知られ、多くの人々がキリスト教なものを感じるということなのでしょうか。そうではありません。もっとも大切なことは悔い改める人々が多く起こされるということです。そして、人々が悔い改めに導かれるためには、まずクリスチャンが深い悔い改めに導かれる必要があります。自分が持っていないものを人に見せることはできないように神の愛を味わっていない人が人に神の愛を伝えるのは難しいことでしょう。自分の罪が赦されたことの恵みと解放感を知らないで罪の赦しの恵みを伝えることは出来ませんし、伝わりません。ですから伝道とは、クリスチャン自らの悔い改めから始まり、悔い改めの姿勢は生涯続くものなのです。

では私たちはどのように悔い改めればよいのでしょうか。そのことをペテロの悔い改めの箇所から学びたいと思います。今朝の箇所は、イエスがゲツセマネの園で捕まえられ、宗教裁判を受けるために大祭司カヤパの官邸に連れていかれたときのことが描かれています。イエスがゲツセマネの園で捕まえられた時点で十二弟子たちはそれぞれ散り散りになっていました。多くの弟子たちは恐れて姿を隠したのです。しかし、自分たちの主がこれからどうなるのかと心配する者はありませんでした。ペテロも身を隠しながらでしたが、大祭司の中庭まで潜り込んで、この宗教裁判の結果を見届けようとしたのです。ところがそこにいたひとびとから「おまえはイエスといっしょにいただろう。お前も仲間のひとりだ。」と言われたのです。そのときペテロはこともあろうに「私はイエスなんて知らない。」とイエスを否定し、のろいをかけて誓いさえしたのです。そして、ペテロはそこから逃げ出しました。そのとき夜明けを告げる鶏が鳴いたのです。そこで、ペテロは「今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」と言われたイエスのことばを思い出し、自分の犯した罪を悔いて激しく泣いたのでした。

ここには悔い改めのさまざまな要素が含まれています。まずペテロは自分の罪深さ、弱さを認めています。ペテロはイエスが捕まえられる前、他の弟子たちの前でイエスに「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。…たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」マタイ26:33,35と言っていました。その時点の気持ちに偽りはなかったでしょう。ペテロには死に至るまでも従い通す覚悟があり、自信がありました。「おれはイエスの一番弟子だ」という気負いもあったことでしょう。しかし、人間の覚悟や自信、そして気負いほどもろいものはありません。ぬいぐるみの人形のように柔らかいものは落としても壊れませんが、ガラスの皿やカップのように固いものは落とすとすぐ壊れます。ペテロはイエスから「岩」という名前をもらいましたが、この時点ではペテロはまだガラスの岩だったのです。硬いことは硬いのですが何かの拍子にすぐに割れてしまう脆さをもっていました。ですから何事にもびくともしない岩になるまでにはまだ通らなければならないステップがありました。私たちの多くは「プライド」という虚像の中に生きています。悔い改めとはそれを捨て、あるがままの自分を知り、認めることです。また、罪を犯したとき、言い訳を作るのはアダムとエバ以来の人間の本性です。「あのような状況では他に選択がなかったのだ」とものごとを理論化します。「みんなそうしているではないか」と一般化します。頭のいい人ほどたくみに言い訳を作るのです。しかし、「プライド」と「言い訳」のあるうちは悔い改めに導かれることはありません。ペテロのように自分のあるがままの姿を認める必要があるのです。

次にペテロはそのような自分の罪を嘆き、悲しみました。悔い改めは最終的には人をよろこびに導くものですが、そこに至るには悲しみを通らなければなりません。ペテロは恐れにとらわれて自分の主を否定したことを深く悲しみました。悔い改めは知的なものだけではありません。それは感情的なものでもあるのです。「感情的」と言うと普通は「一時の感情だけで行動すること」という好ましくないことを指しますが、ここで言う「感情的」というのは「感情を含むもの」「感情にまで及ぶもの」という意味です。それは罪を悲しみ真理を喜ぶことです。自分が犯した罪を知性で、つまり頭で冷静に理解するだけでは足りません。それを悲しみ、嫌うところまで行かなければ悔い改めにはならないのです。コリント第二 7:10 に「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせる」とあるとおり、ペテロの涙は真実な悔い改めを示しています。そしてそれは悔し涙ではありません。

ペテロの悔い改めから、罪を認め、それを悲しむということを見ましたが、もうひとつ、忘れてはならない要素があります。それはペテロが「イエスの言われた…ことばを思い出した」ということです。もし、私たちの悔い改めに神のことばに立ち返るという部分がなかったら、それはただ自分の惨めさを嘆き悲しむだけのもの、たんなる後悔で終わってしまいます。そして流す涙は悔し涙となってしまいます。ペテロはイエスのさまざまな力あるわざを目にしてきました。「あなたこそ生ける神の御子キリストです」という信仰の告白にまで至りました。イエスが神の御子としての栄光の姿になったのを目撃するという普通の人には許されていない体験すらしています。彼は信仰の高みにまで引き上げられたのに、今は、主を否定するという罪を犯してどん底にいます。しかし、ペテロはそのどん底でイエスのことばを思い起こしたのです。二つのイエスのことばが挙げることができるでしょう。一つはここにある「鶏が鳴く前に三度、あなたはわたしを知らないと言います。」マタイ 26:75 のことばです。これは前々からペテロのことを信頼していなくて、イエスのために死も怖くないと言っても、結局は裏切る者であると予想していたということではありません。主イエスは私の弱さ、罪深さ、もちろん強さや良い点も含めて、すべてをご存知であるということです。「私のすべてを知っているお方がいる。」ということはこの期に及んで言い訳したり、一生懸命何かをして取り繕う必要がないということです。このような時、最初、心はとても不安なように見えますが実はこれが最も平安に至る道なのです。もう一つのことばはルカ 22:31-32 にあります。「シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」なんという恵み深いことばでしょうか。これはペテロにその罪から立ち直ることをも約束されたイエスのことばなのです。

ペテロはその手紙に「主は、…ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる」ペテロ第二 3:9 と書きました。これはペテロ自身の悔い改めの体験から出たことばです。ペテロは「ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる」神から悔い改めの恵みをいただいて救われたひとりでした。ですから、すべての人に悔い改めを勧め、そのことを祈っているのです。「すべての人が悔い改めに進むように。」これは今も変わらない神のみこころです。神はいつの時代の、どの国の、どんな人にも悔い改めを求めておられます。神は、今も、全世界のすべての人が、今、ここにいる私たちが悔い改めの恵みを受け取るのを待っておられるのです。

祈ります。